

いわゆる、大衆の心

甲「ぼくなんか、仏教などつまらないものだと思う。もうこのごろの若い者で仏教などに興味を持っているような者はない。あんなものは時代とともにすたるものだね。」

乙「そうか、どうして仏教などつまらないものかね。」

甲「それは、大衆の心をひきつけてゆく何ものもないからさ。死にかかった爺、婆よりほかに、心から信じている者はないじゃないか。」

乙「なるほど、それでは問うが、大衆の心というやつは、何にいちばんひきつけられているかね。」

甲「先日、ぼくは石井漠の舞踊があつたが、たいへんな人気だつたね。しかも入場料二等だつて一円さ、仏教なんて、どんな大家が来たつて、一円はおろか二十銭の入場料だつて払いはしないよ。」

乙「なるほど、そうすると大衆の心は、石井漠とか石井小浪とかの舞踊にひきつけられているわけかね。」

甲「それだけじゃない、この間、ある劇場へ、入江たか子、あの映画女優が来たがね。そりゃそりゃたいへんな人気だ、あの大きな劇場へ押すな押すな騒ぎだ。」

乙「なるほど、そんな所へは高い料金を払つて押すな押すな騒ぎで、仏教だとくると、一銭や二銭のさい銭をとつても搾取々々と言われるのだね。ところで、君に問うが、石井漠の舞踊を見て、君は何を得たかね。」

甲「それは、その、……、彼の芸術の高いのに酔うたね。」

乙「それで、君、何を得たかね。」

甲「それはその、ぼくの芸術の眼を開いてくれたね。」

乙「それで君は、漠のように踊れるかね。」

甲「君は少しも、芸術に対する理解などないじゃないか。ぼくに踊れるものか。」

乙「そうか、いつたい漠は一晚どれだけでもらうのだ。」

甲「ぼくはよく知らんが何万円だろうね。」

乙「すると、君よりもよいことをしたのは漠だね。君の手元には何も残っていないじゃないか。入江たか子の場合だつて、君の手元に、そうたいしたもののは残っていない。日本で一だとか、二だとか言われる声楽家、藤原義江とか、関屋とし子とかの歌うたいの上手な連中は、一晚に一声千両といわれるが、あの連中は、日本へ帰つてお金を作つては、すぐ外国に逃げる。金がなくなると、やつて帰る。長い間日本にいたのでは人気がおちる。そこで何度でも新帰朝くとやるんだそうだが、大衆はそんなものに心をひきつけられているわけだ。あの連中も、君のいわゆる大衆の人氣、群衆の心をひきつけているものだろうね。」

甲「もちろんだ！」

乙「そこでおれは君にはつきり言いたい。大衆の心をひきつけていないところに仏教家の悪かった所もあるが、大衆の心をひきつけていないから仏教がつまらないということには、ちつともならないことだ。」

甲「なぜだ。」

乙「君、今ごろ流行のレビューというやつだね、女がほとんど半裸体になって踊っているやつだ。あれを、口あんぐりあけて見とれている心、あれは、踊っている者は芸術か知らないが、見ている連中は、まったくのいわゆる無意味じゃないのか、あのナンセンスな心をひきつけるもの、そんなものは、仏教には持ち合わせがないさ。言いかえると、もつと人生を真剣に考えよう。社会や、人生、国家、さらにその根本に自己のほんとうに生きる道を切り開いて行こうというのが仏教なのだからね。釈迦の出発が、レビューや石井小浪のきれいなすがたに見とれているのとは別の所から生まれたものだよ。おれもこの間、ある方に案内されて、一流の演芸館？に、万才、落語、等々を聞きに行った。はじめ二、三十分ばかりはおかしくて笑いました。が、後はばかきさくさく帰る路には物足らないさびしきと、疲労とが残っていた。君だつてそうじゃないか。漠の舞や、藤原義江の歌を一円出して見て帰る時に、心の底からの満足、あるいは一生の記念塔になるような感動が残っていたかね。」

甲「そう言えばそうだなあ！ 一生に一度は有名なやつから見とおこうと思つたからこのことだよ。ほんとうを言えば……。」

乙「そうすると、仏教などへ来ないようになつたのは、仏教がいけないのか、大衆の心の動きをどうにかせねばならぬのか、わかっただらう。」

甲「それじゃいつたい仏教の眼目は何だらうか。」

乙「それなら語らう。」